

公園の機能とその役割の分担

社会学科一回生

中土居

1、背景・問題意識

休日、甲南大学のグラウンドに来てみると、大学生に混じって小学生や、親子連れが遊んでいることに気がついた。これは甲南大学が地域の公園として機能していることを意味しているのだが、決して大学のグラウンドは大きいものではなく、みんな押し合いへし合い遊んでいる。ほかに公園はないのか疑問に思い調査することにした。

2、調査の目的

甲南大学周辺にある公園を比較してどのような公園があるのか調べる。

3、調査対象

阪神沿線までの岡本、西岡本にある公園

4、調査方法

- ・ 公園の全体的な写真を撮る
- ・ 公園の状態を調べる

5、調査時期

10月17日～10月17日 午後

6、調査項目

- ・ 公園の大きさ
- ・ 賑わい具合
- ・ 地面や遊具の状態

手入れがされてなかったりするとその公園はあまり遊ばれていない可能性が高い。

7、調査結果

西岡本方面

屋敷本公園　　小さな敷地で、遊具はすべり台がひとつあるだけで、地面には雑草がびっしり生えており誰も遊んでいなかったことから長い間放置されていることがわかる。



本山親子遊園　　グラウンドは甲南大学のグラウンド並みの大きさと、奥のほうにアスレチックがあった。グラウンドのほうには20人ぐらいの人たちがサッカーの練習をしており、アスレチックのほうには2、3人の子どもが遊んでいた。



西岡本公園　　形状としては細長い感じで住宅の間を縫うように存在している。住宅街の中であって緑が多かった。遊具はすべり台とブランコがあり、ブランコはチェーンのさびがひどく漕ぐことができなかった。遊んでいる人はいなかったが、散歩をしている人が何人かいた。



十文字東公園　山の手にある公園で標高が高めである。住宅街のはずれにあることもあり、誰一人として遊ぶ人はいなかった。遊具はブランコとすべり台があったが、砂場ですら草が生えており、公園全体が草まみれという印象であった。



十文字西公園　十文字東公園から少し離れた場所にあり、遊んでいる人はいなかったが、十文字東公園よりも住宅の中にあるせいか二人ほどベンチでくつろいでいた。遊具はブランコとすべり台があり、状態は比較的よかった。



岡本方面

長子公園　　ちょうど甲南大学のとなりにあり、人通りも多く、多くの大学生がベンチに座ってくつろいでいた。グラウンドは甲南大学のものよりかなり小さめであったが草も生えておらず手入れされていて、何人かの子供がボール遊びをしていた。遊具はブランコとすべり台があった。



岡本南公園　　岡本駅の近くにあり、ほかの公園と違って遊具はひとつもなく、桜の木々を植えて憩いの空間を前面に押し出した公園になっている。ベンチがいたるところにあり、大学生から近所の人などあらゆる人がくつろいでいた。



岡本公園　　この公園も岡本南公園と似ていて、遊ぶ空間よりも憩いの空間のほうが強く、岡本南公園が桜の木を多く植えているのに対してこの公園は梅の木を植えていて、散策型の公園である。ここでは散歩している人を多く見た。



8、分析

一言で公園といっても様々なタイプの公園があり、人によってその利用の仕方も様々であった。ただ比較的遊ぶ人よりもベンチに座ってくつろいでいる人や散歩をしている人のほうが多かった。それはどの公園もそれほど大きくはなく、ボール遊びなどをするのに向いていないからであると思われる、また公園に子供の姿をあまり見ることができなかったのでそれも原因のひとつであろう。人の集まり具合では植物の多い公園のほうがより人が集まる傾向にあった。ここから考えられることは人々が公園に求めているものは安らぎであり、落ち着くことのできる空間なのである。しかし遊ぶ人がまったくいないわけではない。そういう人たちの憩いの空間が甲南大学にあるということである。つまり岡本の公園は動的な公共空間としての役割を甲南大学のグラウンドが主に担い、静的な役割をそのほかの公園が担っていると思われる。あと誰にも遊ばれていないさびた遊具を見るとたとえ遊ばれていなくてもそれは公園というものを示すシンボルのような役割を果たしていたように思える。そうすると元々公園というものは遊び場としての役割が強かったと考えることができ、今静的な公園が多いのも少子化の影響で遊ぶ子供が減ったためだと考えられる。

9、まとめ

今回のタウンウォッチングでは公園を観察したのだが、公園に訪れたのは小学生以来だったので懐かしい気持ちで調査できたと思う。もっと人の数や公園の広さなど詳しくデータを取るべきだったと思う。